

慶應義塾柔道部史

第二卷
創立百年記念

福澤先生と
塾柔道部への訓え



慶應義塾は第一所の學塾として
日本可人すとて國を教導する我事國中
於て是れ氣品の卓爾源流有徳の操範を以て
之輔一之三重除一にて厥家震世立廟の
而後光明一之三重除の如きより斯リ
宣誠以て今後學の先導者たゞんと裡す
まのう

明治二年正月
福澤諭吉



慶應義塾の目的

幼稚舎初代の舎長、和田氏は紀州和歌山藩の人、武芸に長じ、関口流柔術の達人、藩より選抜され鉄砲州の慶応義塾に学ぶ。後に塾内に和田塾を開き、明治九年の頃、規模を拡張して幼稚舎と呼ぶ。舎生の体育に柔術稽古が行はれ、茲に塾柔道部の創始を開いた。



和田義郎先生



明治二十五年七月二日午前十一時より旧関口流を学びし柔術生二十二名、和田先生の尊影を掲げ、荒川写真館に於て撮影す（慶応義塾幼稚舎史日録28頁より）

慶應義塾柔道部の記

我が柔道部は塾祖福澤先生の奨励
に依り明治十年の春三田山上に開始也
から爾來漸次に發達したるものにして實
我國體育界の先驅をなせらばり内に
在ては和親一致整風の涵養を謀り外
に向ては義塾精神の宣揚に専め専ら
叢書品の泉源智徳の模範を以てヒトを
期じたり乃ち先生の「先成獻身而後
養人」心身之順是柔道」と云ふの
二つの成謡の趣旨に隨て經營し來り
私のなり

斯の如き先輝ある歴史を有する我が
柔道部の部員たるものは深く之を肝に
銘じ力を奮せて部の向上も圓り流俗の
外に立ち掲立自尊の整風に依て思想
の中に保ち得来國家の柱石社會の
儀表たることを心懸くべきなり

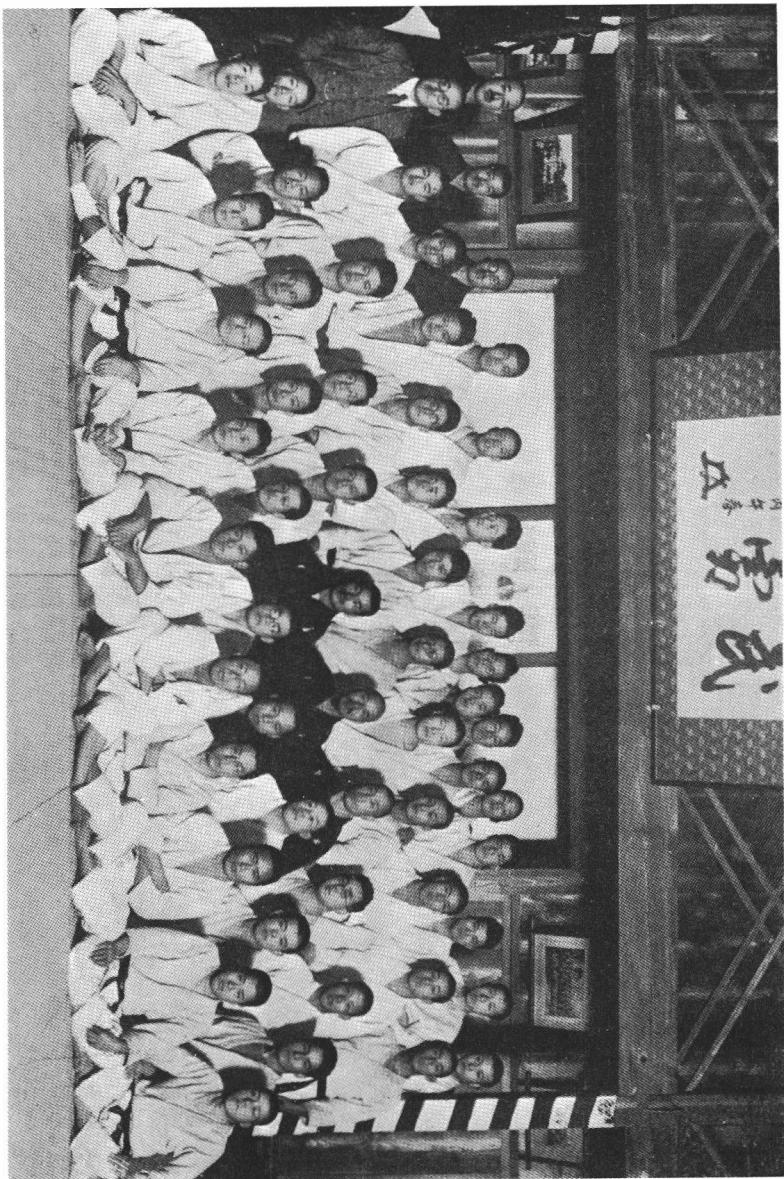
昭和七年五月九日

慶應義塾創立七十五年記念日

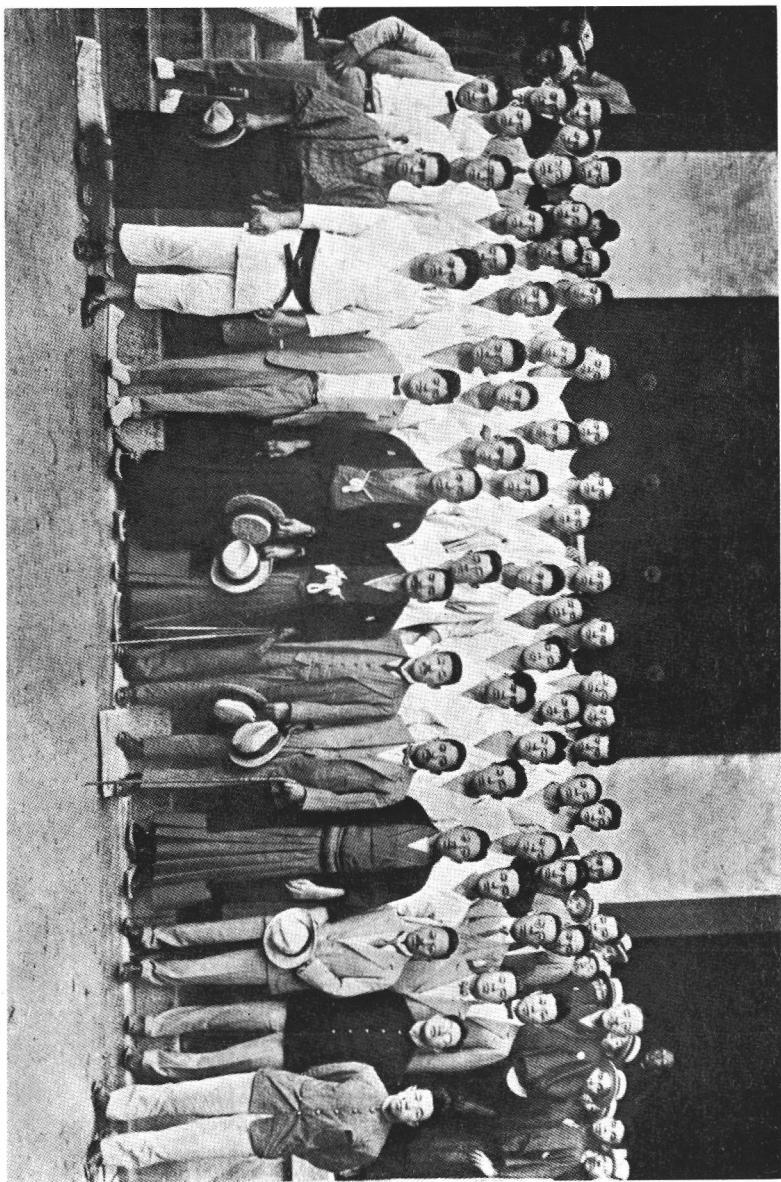
鎌田榮吉記

明治三十一年、福沢先生を中心に浜野部長 山下師範と当時の部員

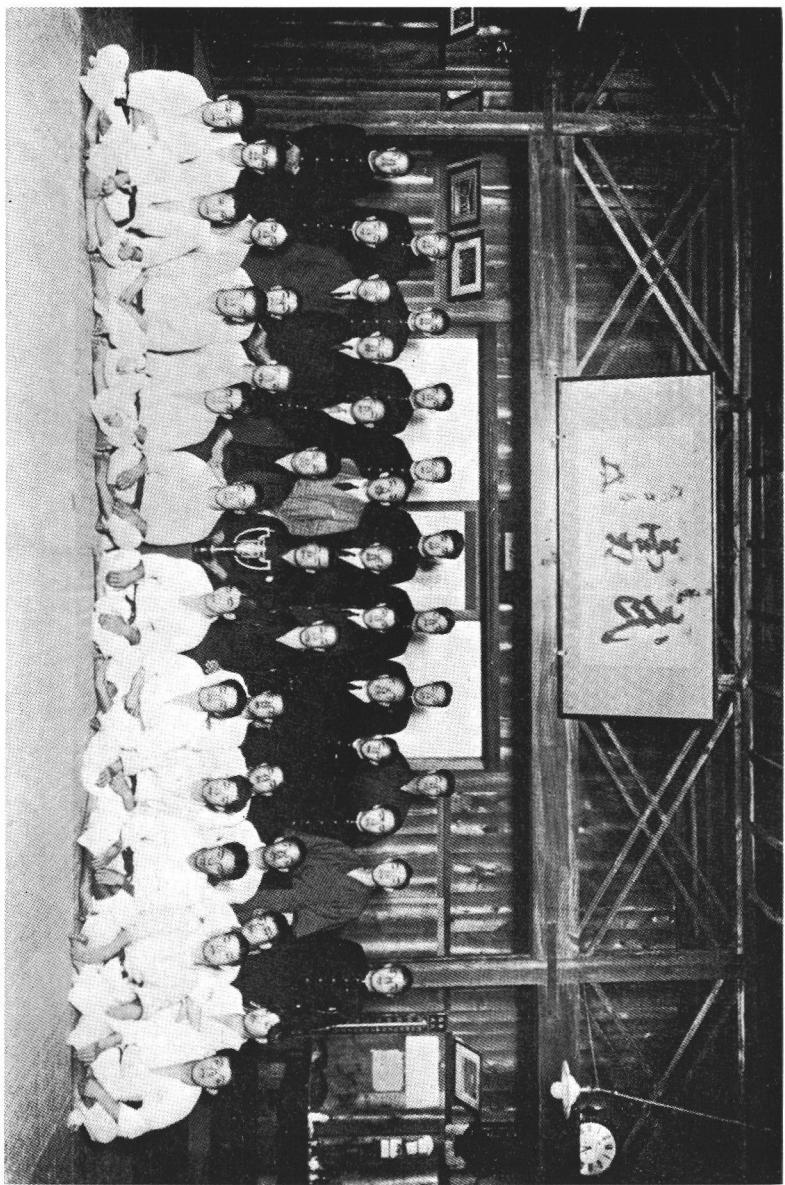




大正十二年、当時の有段者



大正十四年、関西遠征（大阪武徳殿）



昭和三年、第一回早稲田高等学院対慶應予科高等部戦、優勝

例 言

- 一 題字「慶應義塾柔道部史」は先輩、最古参の中野栄三郎氏の揮毫を煩わした。
- 二 資料は戦前のものは主として部保存の勝負記録帳、体育会誌、柔道部々報（昭一四、第一号より第三号）三田評論及講道館発刊の「柔道」、読売新聞（早慶戦後援）。戦後のものは前記資料の他、三田柔友会報告、柔友会報、体育会月報及体育会試合届、その他会員有志（編纂後記に氏名記載）の提供資料に依る
- 三 本書は慶應義塾柔道部史第二巻、創立百周年記念として、同第一巻（明治九年より昭和七年—佐野甚之助〔編纂〕）に続き、昭和八年より同五十一年までの四十四年間に亘る、試合、行事の記録に年度毎の寄稿文を配し、別に「温故知新篇」を設けて年度関係以外の寄稿文を収録し、更に第一巻に属する事項を年表にして載せた。
- 四 本書の原稿作成は委員五名の分担執筆であるので、文体、用語、仮名使いは出来るだけ調整したが、戦前戦后に於ける相違は資料のものをその儘に記載した。
- 五 試合記録中、大学のタイトルは大きく、高校、普通部中等部のものは小さくして区別した。又月次試合は試合順序に従い番号を付して、抜勝負の形式で記載した。
- 六 各年度の占める頁数は、年度に依り大きく異なるがこれは必ずしも部の盛衰に關係なく、記録の整理保存の良否に依ると見るべきであろう。
- 七 幹事及体育会役員並功労章受賞者の氏名は特に戦前のものに付て凡そ見当はつくが記載資料がないので除いた部分がある
- 八 寄稿文に就ては予め題材を予定して御書き願つた、温故知新篇に入れたものと年度記録篇に載せたものとの差別はなく、編纂の方針に縦つて分けた
- 九 寄稿文の内、御許しを得て修正を加えたものが、あるが連絡不充分で、御不満もあるかと推察し、御寛恕を乞ふ

十一 試合のタイトルに就て資料は「試合」「勝負」又春、秋季紅白勝負とあるもの、又は第〇回秋季大会とあるもの区々であるが、第二卷を於ては「勝負」とあるのも「試合」とし、春又は秋季大会のみに統一し、戦後は回数を表示していない。

柔道部史の発刊に寄せて

塾長石川忠雄

慶應義塾体育会柔道部の創立百周年を迎えるにあたって、柔道部史第二巻が発刊されることをうかがい、誠に欣快に堪えません。

それぞれ長い歴史と伝統を誇る体育会各部の中でも、柔道部は、百年の昔にその源を発する最も長く輝かしい歴史をもつ部であり、また、わが国の学生柔道の先駆者であります。そして、学生体育の発展に大きく貢献してきたばかりでなく、「慶應義塾柔道部の記」に見られる通り、「内に在ては和親一致塾風の涵養を謀り、外に向ては義塾精神の宣揚に努め、専ら気品の泉源智徳の模範たらんことを期し」、塾風の担い手として役割を果した功績の大なることは、誰しも認めるところであります。

歴代の部長、師範の方々の心血を注がれたご指導、先輩諸氏の絶えざるご援助、部員諸君の不断の努力があってこそ、この光輝ある百年の歴史が築きあげられたものと、塾長としてここに改めて、深甚な敬意を表する次第であります。

翻つてわが国の現状を考えるとき、私は今の日本は、国際的にも社会的にも、いわば、転換と摸索の時代にはいってきていると思うのであります。このような時代を生き抜いていくためには、単に知識だけではなく、もっと分析力とか判断力とか構成力といった能力や、ヴァイタリティをもった人間を育てることが、大学の教育に要求されてくると思われます。一方、最近のように、同一年令層の三十数パーセントが大学に進む状況になれば、いわゆる学歴社会も徐々に崩れざるを得ず、実力主義の時代にはいってきており、慶應義塾といえども、もはや名門という名の上にあぐらをかいてはおられぬと思うのであります。

今こそ慶應義塾は、その建学の原点に立ち戻つて想いを新たにし、福沢先生があの明治の転換期に、新しい時代に挑戦していく能力をもつた人材を世に送り出したように、現代の先導者を育成しなければならぬと思うのであります。

このような時、慶應義塾の中にあって、体育会の果たす役割は今まで以上に重大であります。光輝ある歴史と伝統をもつ柔道部の関係各位が一致協力して、「先づ獻身を成して後、人心を養い」、そして、全社会の先導者となる有為の人材を輩出させていただきたいと、切に念願する次第であります。

祝

辞

体育会理事 金子芳雄

慶應義塾柔道部が、本年を以て創立百年を迎える由、大変おめでたく心よりお祝い申し上げる。そして、この度、塾柔道史第二巻を出版されるとのこと、これにより一世紀にわたる先輩がたの輝かしい足跡が、ながく記録にとどめられ、柔友会にしてはじめておこないうる快挙と、関係各位と共にお慶び申し上げたい。実は体育会の方も、本年が創立八十五年にあたり、秋に記念式典や諸行事をおこない、また八十五年の歴史を物語る「体育会年表」を公にする。このような諸行事や出版は、執筆はもちろんその他についても、人に知れない苦労をしなければならない。柔道部創立百年のお祝いを企画し、実行されたかたがたのご苦労についても、敬意を表さなければならぬ。

さて、現在、体育会には三十六部がある。柔道部・剣道部・弓術部……と続くわけである。そして、われわれは、柔道部を三十六部中筆頭の部として取扱う。もちろん、三十六部は、すべて平等で、どこの部が偉くて、どこの部がその下にあるとかいうわけではない。また、大変失礼な表現だが、現在の柔道部はそれ程強い部ではない。部員もかつての百名に近い大世帯から、一時、二十名

位になり、最近関係各位のご努力により次第にふえ三十余名となつた。三十六部のなかには、全日本学生選手権をとつたり、百名近い部員をかかえている部もある。しかし、それでもなお、われわれは、柔道部の部員諸君に、三十六部中筆頭の部としての、自覚と責任を期待する。部の対校競技の成績一つをとりあげても、強ければ強いなりに、弱ければ弱いなりに、模範たることを期待する。もっと卒直にいようと、たとえ試合に負けても、「やはり柔道部だけのことはある。負けても立派だ」と。また、勝ったときには、「試合は勝ちさえすればよいというものではない。柔道部のよう立派でなければ」と。

このような責任と期待をかけられた現役部員諸君は大変である。しかし、われわれがこのように期待するのは、過去の柔道部百年の栄光が、現役部員に引継がれていると考えるためである。

古き栄光のみを夢みるものは、衰亡する、古き栄光をふまえ、これに若き血汐をそそぐとき、そこに輝しき将来がひらける。例えば、寒稽古のさい、綱町のさして広くない道場に、幼稚舎から大学部員さらに多数の先輩が集る。実にはほえましい風景である。しかし、これを、単に、和気あいあいたるものとみるべきではあるまい。これは、義塾の伝統たる社中協力の一縮図である。先輩がたが、無言のうちに柔道部の伝統を後輩へ教え伝えている姿である。

最後に三田柔友会の諸賢の御発展をお祈りし、あわせて現役諸君が、五十年後にできるであろう塾柔道史第三巻をかざるにふさわしい活躍をされることを期待する。

柔道部創立百年を迎えて

柔道部長 阪 塙 光 男

柔道部が創設されてから、今年でちょうど百年になる。この記念すべき年に、はからずも私は柔道部長の任に就いた。石川前部長が慶應義塾塾長に就任されたため、その後を受け継ぐことになったのである。

体育会の中でも百年という輝かしい歴史と伝統をもつ柔道部を考えるとき、その任の重さと責任とを痛切に感する。柔道部の今日の成績は、創設当時と比べて確かに良いとはいえない。しかし、石川前部長の御努力の結果、少しづつ好転していることは事実である。私自身柔道は不得手であるが、柔道部をより強くしたいと思う心は人後に落ちないつもりである。また私は困難に会うことをお好む。七転び八起き、一趺して奮起し、また一趺して奮起する、これを繰り返していく、はじめて栄冠を戴くことができる所以である。その時の一日も早くくることを念願して止まないとともに、私はその日が必ずくることを確信している。

ここに柔道部創立百年をお祝い申し上げるとともに、今年を契機に部員諸君が一段と奮起し、良

い成績をあげられることを望むものである。私も微力ながら柔友会の御支援を得て柔道部のために
粉骨碎身、努力してゆく所存である。

序

文

三田柔友会長 秋山 正

私が故五島三雄氏の後任として三田柔友会長を御受けした後、暫らくして開かれた委員会で副会長の羽島輝久君から昭和八年以降の部史を編纂してはどうかという提案があり、委員全員が之に賛成、「慶應義塾柔道部史」第二巻の発行の件が決定した。次に之を誰に依嘱するかの議をはかつた結果、之又全員、内海勝正君を以つて適任とするとの事となり私より同君に依頼した処、幸い同君の快諾を得て茲に「三田柔友会部史編纂室」が設置され直ちに活動を開始した次第である。

編纂室は内海君を主任として、渡辺紀久男君、小林浩一君、杉浦潤君、滝沢緑郎君を補佐として約二年の歳月を経て漸く本年十二月完成の運びとなつた。私にとって此の上もない喜びである。

第一巻の編纂者佐野甚之助氏は第一巻の巻頭に「編纂を了りて」と題する所感を述べておられるが、その最も苦心とせられた処は資料の蒐集であつて特に柔道部草創時代の記録について福翁自伝、福沢諭吉伝等迄取材の対象とされている。

第二巻の編纂に当つても内海君以下編纂室全員の最も苦心した処も又資料の蒐集であつて特に戦

中、戦後に国乱、空白時代があり之の整備、整理に如何に苦心されたか想像にかたくない。卒業生送別大会写真等も所有者を探して漸次集められたと聞いている。詳細については内海君自身編集後記に記される處であるう。

聞く処によれば頁数は千三百頁にのぼり集め得る可能な限りの記録を収録した外諸先輩の回想談も數多く集められ同種刊行物としては蓋し他大学にも類を見ないものと考へられる。

たまたま本年は柔道部創立百年に当り部史発刊を見た事は極め時宜に適し又有意義なことである。三田綱町に又日吉に、限りない想出のある柔道部出身者は是非一読される事を強くお願ひしたい。

近年、特にオリンピック大会に柔道が参加して以来、審判規定の変更に伴ない柔道そのものが大きく変つて来た様に思われる現在、永く正統な柔道の伝統を守つて來た慶應義塾柔道部の歴史にふれる事は極めて重要な事ではなかろうか。此の際柔道そのものを考える良い機会として欲しいものである。

最後に何日の日か第三巻が出版される事があると思われるが今回の経験によつても記録の保存が最も重要であることが充分理解された事と考えられるので今後各年度幹事に於いては常に此事を念頭におき対処される事を希望する。